



黄色の顔

コナン・ドイル

訳 本間久四郎

明治や大正のホームズが読みたい！そう思ってネットで検索したところ「明治期シャーロック・ホームズ翻訳集成」と言う書物にめぐりあいました。ところがなんと三冊セットで五万円！これではちょっと手が出ない。

国会図書館のサービスで何冊か見つけたのですが、これはそのままでは読むにたえない、その内いくつかはキンドル本にもなっていますが、これも同じ...

そこでできる限り読みやすいようにと整形したのが、先の「不思議の鈴」とこの「黄色の顔」です。

パプーでそのままお読みになるより、PDFをダウンロードして、アドベリーダーの閲覧モードでお読み下さいることを期待しています。なおPC専用です。

これ、青空文庫でも読めない少々貴重な電子本（と、自己宣伝）なのですが「不思議の鈴」のダウンロードは1名だけ...需要があるならもっと作りたいのですが。

快漢ホルムス第一編

黄色の顔



夜 香 郎

笑 變 窟 發 行

諸君に告ぐ



今、この書は、
 著者の世界で有名な高いコナン・ドイル氏ですが、私は之を
 一般の家庭に娯樂的讀物として頂きたいと思ひまして、
 西洋流の管々しい説明や其他我邦の讀者に興味を感ぜし
 めないやうな所は遠慮なく削つて極くやさしく書いたの
 です。此點に於て私は遙かに蔭ながら原著者にお詫を

39 6 1
 治 朗

致さなければならぬのです。

此「快漢ホルムス」は毎月一篇づゝ發行して約そ一年位みて以て全部完成にする豫定で一篇は一篇より妙に奇々怪々にはかる可らざる者を御覽に入れ積りであります。そこで序でだから第二編を御披露致して置きますがそれは「身體が二つ」といふのです。

然し私は無名の一青年で苦しい中から工面した所のも一切を擧げて自費出版をしたのですから此第一編の賣れ行き如何に由つては第二編をも發行が出来ぬかも知れないのです。そこは宜しくお察し下さい。

明治三十九年五月下洗

本間夜香

快漢ホルムス第一編

黄色の顔

第一章

「ヤアロックホルムスは別に運動の爲めと言つて運動をした事が餘り無い平生運動でもして鍛へても置かず非常に身體を使ふ事の出来る人といふものは滅多に無いものだ。此ホルムスなどは特別に出来上つて居ると見える。全く彼れは非常に強健な男なんだ。一体「目的の無い肉體的勞作はエネルギーを浪費する」と言ふのが彼れの説

でホルムスは何か自分の本職に關した事でもなければ、滅多に運動をしない男だが、さてそのエネルギーは何れ程強いのか、一度本職に取りかゝつたらモウ倦まず撓まず飽くまでも行るところまで行り通すから不思議だ、何しろ探偵が本職といふのだから常に難義な場所に入出入するのだが、彼れは食も節するし、其他有りとも有らゆる辛苦艱難を事ともしないのである。

ホルムスは探偵が本職と言ふても、我輩猫の夏目漱石君の嫌ふやうなお役人の探偵ではないので、時々コカインといふ迷蒙薬を服用するといふ悪習慣を除けば善を助け惡を懲らす立派な紳士である。然し、彼れがコカインを服用す

るといふのも畢竟差當り探偵すべき秘密もないとか、又は新聞に面白い事もないとか云ふ場合に變化の無い生活を紛れる爲めに服むんだから大いに許すべき點が有るのだ。

第二章

春も初めの或る日のこと、ホルムスは僕と一緒に公園へ散歩に行かうと言ひ出した。珍らしい事もあるもの、先生餘程退屈で打ち寛ろがずには居られなくなつたと見えると思ひながら連れ立つて行つて見ると、楡の樹の梢には新緑の色、微の見え胡桃の木の芽はこれから破れて、五つ褶の有る葉にならうとするところ、實に爽やかな心地がするので

ある。

そこで我々は二時間ばかり、餘り話もせず、に彼方此方と歩き廻つた。我々は親友だから何も、那麼に空世辭を使ふ必要も無いと思つたので。

ペーカア町の宿へ歸つたのが殆んど五時。我々が休息して居るところへ……さア、事件はこれから始まるのだ！

第三章

「御免下さい」と斯う言つて扉を啓けたのは給仕で、「貴君にお目に懸かりたいッてお客様が今しがたまでお待ちでした、ヘエ男の方で。」

「餘り散歩し過ぎたな！」とホルムスは、僕を責めるやうな一瞥を呉れて、更に給仕に向ひ、「ぢや、其人は歸つちまつたんだね？」

「へ、左様で御座います。」

「お前、お入りなさいッて言はなかつたのか？」

「さう申し上げましたので、お客様は此室へ入つてお待ちになつたので御座います。」

「どれ程の間待つてゐて呉れたんだらうね？」

「三十分ほどでせう、其方はね、貴君、大變に忙しない方で、したよ、モウ此室に待つて在らッしやる間しよ、ちう歩き廻つたり足踏みしたりなすつてね、私は此扉の外で御用聞き

をしてたもんですから何を爲さるか悉皆聞てえたんですがねすると少し経つてから遂々扉口へ出てゐらしつて大きな聲で「なか／＼お歸りなさりやアしないやうだね？」と仰在るもんですから私が「まアもう少々お待ちなすつて御覽なさいましもうお歸りの頃でせうから」と申しますとね「いやそれぢや戶外でお待ち受けしやう何だか息が塞まりさうな氣がするから」と斯う仰在いましてね「又直ぐに來るから」つて私が色々お留め申しましたけれども遂々お出かけになりました。」

「よしよし御苦労だつた。」
と給仕の出て行くのを見送つて、ホルムスは更に僕に對ひ、「どうも困つたねワットン君何か事件が有れば好いと思つてた所なんだのに……實に困つた事をしたなア。那麼に匆惶してゐたといふんだから餘程大變な事なんだらうが……おヤッ！その卓子の上に載つてゐるのは君の烟管ぢやないね！今の人忘れて行つたんだな……ム、こりや上等の物だ古い荆棘だホウ琥珀が附いてゐるな却々贅澤なもんだ。這麼大切な物を忘れて行くやうぢやア餘程ヒドク考へてる事が有るんだな。」

「大切な物といふ程の價値が有るかねえ。」と僕は訊いてみた。

「そりや有るさねえ見給へ。ホラ此パイプは二度ばかり繕

ろつてあるだらう……一度は木材質の所と、一度は琥珀の所とね。そして君其修繕が銀でして有るぢやないか。銀で一度やれば殆んど此烟管の價格位ゐは費るからね。そうして見ると、それだけの金があれば優に新らしいのが買へるのにさ、好んで此れを繕ふ爲めに費やすところを考へて見給へ。此人は餘程これが大切なんだよ。」

「其他には？」と又僕は尋ねた。

ホルムスは掌中に烟管を弄りまはしながら、昵と之を覗めて深き思ひに憐んで居る。

そして彼れは、恰も教師が動物の骨を以て講義するやうに、その細長く瘦せた人示指で以て烟管を弾いて、

「よく烟管は非常な面白味を有つてゐるものだよ。時計や靴紐を除いては、これほど能く持主の特性を見はす物は無いからね。其證據がここに有る。然しそれは餘り大切な事でも何でも無いがね。君此持主は明らかに筋力の逞ましい人で、左手利きで、非常に齒並がよく、不注意な性質で、經濟などは顧りみないでも、好い人と思はれるね。」

と無造作の様で言ひ放つたものゝ、彼れは私が其推察を謹聴して居るか、奈何かと斜眼にひツかけて居るのが能く解る。

「ぢや君は七シリングもする烟管で喫烟する人だから、可なりに生活して居るんだらう、と斯う言ふの？」と僕は尋

ねた。

「いや、こりや君グロスヴェノーと云つて一オシスが八
ペシスもする烟草だ」とホルムスは掌中へ少しづつはた
き出しながら「此半價で優に上等の物が喫へるのに斯う
いふ贅澤をして居る所を見れば、必ず彼は經濟を顧みる
必要が無いのだ。」

「其他の事は？」

「ム、彼は洋燈が瓦斯燈の火で烟草を喫ふ癖が有るの
だね。見給へ此烟管を片側ずうツと焦げてるだらう。勿論燐
寸ぢやア斯うはならんさ。誰れが君烟管の横ッ腹へ燐寸を
擦りつける奴があるものか。併し洋燈で點せば必と火皿が

焦げるからな、そして此烟管は右の方が焦げてるだらう。だ
から僕は其男は左手利きに相違ないといふのだ。君まア自
分で試して見給へ、そりや一度や二度は得手を換へる事が
出来るかも知れないが、常に左様する譯には行かないから
な。それから……彼は此琥珀を噛む癖が有ると見えて、ホ
ラまるで噛み通してあるだらう！これで見ると、彼は餘
程筋の逞ましいと言つちやア可笑しいかも知れないが、ま
ア頗ぶる齒に力の有る人で、殊に齒並は馬鹿に好いのだら
う。呀！何だか階段を上つて来る登音がするやうだ。もう烟
管どころぢやないね、これから尙つと面白い研究が出来る
のだ。」

第四章

十二

間もなく扉は開かれて、そこへ丈の高い、若い男が入つて来た。見ると、彼は上品な黒ッぽい服を着て、年輩は三十位みだらうと思はれるので、イヤ實際は尙つと老つてゐるかも知れないが、僕には然うとしか見えなかつたのだ。

彼は聊か惑ふやうな容で、

「嗟！どうかお許しなすつて下さい。私はモウ扉打をやつた所存でした……無論……打かなきやならないんですから……どうも事件の爲めに私は少し氣が變になつて居るので、すから、どうか其故とお許し下さい。」と彼は恰も目

が眩んだ人のやうに額へ手をやつて椅子に凭けた、いや寧ろ倒れたのである。

「貴君は二晩ばかりお寝みになる事が出来ませんでしたらう。」とホルムスは心やすげに「どうも左様いふ事は何よりも烈く神經に應へるものですからね……一体甚麽事ですか伺はふぢやありませんか。」

「私は貴君から忠告をして頂きたいのです。ほんとに奈何したら善いか薩張り不可解のですからね。私の生涯はモウ滅茶くになつて行くやうな氣がするのです。」

「一個の探偵として私をお雇ひにならうといふお考へで」

「イエ單だそれ而已ちやありません、私は、思慮ある人としての貴君の御意見を伺がひたいのです……世界の人のとしてのです。私は先づ今度奈何したら善いか其れを伺がひたいのです。」

「彼は少し鋭い投げ出すやうな調子で話すのであつた。そして此話をするといふ事が全く彼れに取つては餘程苦痛のやうに私には見えたのである。彼れは更に語を繼いで、

「誰れでも深く知り合ひでない人に自分の私事を打ち明ける事は厭やがるでせう。私が今初対面の方お二人の前で私の妻の行跡に就いて申上げるのは或は危険かも知れま

せんが然し私は奈何しても忠告して頂だかなくちやならないんですから……」

「我が親愛なるグラント、マンロー氏……」と鹿爪らしくホルムスが言ひ懸けると、此訪問者は驚ろきの餘り椅子から跳び上つて、

「なにッ？ 貴君は私の名を御存知で？」と叫んだ。

ホルムスは微笑んで、

「貴君が名を知られ度くないといふお考へなら、帽子の裡へ書きつける事をお廢しになるか、又は貴君の話を伺がつてる者の方へ帽子の頂をお向けにならなけりや不可せん。それで、此友人と私とは此室の中で随分多く奇妙な秘密

を聞きまして、幸ひにも我々はその困つた人々を平和に導ひ
く事が出来たので、すが今貴君に對しても同様に私どもの
力の及ぶ限り盡して上げる事が出来ませうと思ひます。ち
やア一とつ伺がふ事にしませう。時は金なりも古い諺です
が、どうか御猶豫なく事實に就いてお話し下さい。」
マンロー氏は打ち明けるのを餘程困難に感ずるかのや
うに又もや額に手をやつた。其總ての容子から察するに彼
れは遠慮深い克己心の強い人で、そして天性のプライドと
いふものが其心の傷を隠さうとするとするらしい。私は思
つた。やがて彼れは不意に拳を握つて如何にも興奮した態
で語り始めた。

第五章

「ホルムスさん、事實は慙うです。私は人の良人たる身で結
婚してから三年になり、従来私ども夫婦はお互に善く
愛して、實に好い月日を送つて來たのです。全く私どもは只
の一度も隔てがましい事が無かつたのです……心の中心に
も言葉にも所業にもでずね。ところが此頃……前の月曜あ
たりからですが、私どもの間に非常な障が出來上つて了つ
たのです……こりや何でも妻の一身に或る秘密が在るの
に相違ないと私は思ひますが、私どもは今非常に隔たつ
て居るので、一体こりや奈何いふ次第か知りたいたと思ふん

ですが。

十八

然しホルムスさん先きをお話する前に申上げて置かなければならぬのは妻が……エフィーが私を愛して居るのは少しも疑念を容れる必要がないといふ事です。アレが心底から私を愛して居るのは前も今も變りがありませんのですから其事に就て兎や角言ふ必要はないです。然し何か……かう我々の間に秘密が在るやうぢやア實に不愉快です。からね私にそれが解るまでは奈何も落ちつく事が出来ませんので。」

「マンローさんどうか其事實だけを願ひ度いです」とホルムスは稍や性急に口を挿れた。

「ぢやア先づエフィーの身の上に就いて私が知つて居るだけの事を申し上げませう。私が最初アレと逢つた時には尙だ年齢は廿五でしたが既に寡婦となつてゐたのでした。其時はヘブロン夫人と名乗つてゐましたがね。アレは小さい時にアメリカへ行つてアトランタの町に住居をして其所でヘブロンといふ人と結婚したのです。此ヘブロンといふ男は可なりの法律家だつたさうですがね。そして彼等の間に子供が一人出来たさうですが間もなく其地方に惡いイエローファイヴァー(和譯して發黃熱といふ病名)が流行して、良人子供と二人とも死去つたさうです。私は其死亡證明書も見ましたがね。此事がつまり彼女をしてアメリカを

十九

厭はしむるに至つたのです。そこで妻は歸國致しまして、ミッドルセックスのビンナアに居た未婚の叔母と共棲するやうになつたのです。其先夫といふのが四千五百ポンドばかりの金を遺して呉れたものですから、それに七分の利子が附いてアレは何の不自由もなかつたのですね。私が最初彼女に逢つたのはマダ彼女がビンナアへ來てから六ヶ月位あしか経たなかつた時なので……私どもは直ぐにラヴに陥みつたやうな次第で、其後數週の中に婚禮をしたので御座います。

私は商人で、七八百の收入あるものです。私どもは實に愉快な生活が出来たのです。宅はノーブリーで年に八十ポンドの可なりの別荘風の家でございまして、また彼邊は都近いに似合はず實に閑靜な田園です。私どもの上方には宿屋が一軒に普通の家が二軒と、それから宅の前の原ツ場の向ふ側に一軒の小家と在るばかりで、其所から停車場に至るまでの半ば程までば家といふものが一軒も御座いませんので、私の職業の爲に秋冬から春へかけて此ロンドンに居なくちやなりませんけれども夏は格別の仕事も有りませんから、私は妻と一所に此田舎で思ふ存分の楽しい生活を致すので御座います。全く此度の厭やな事が始まるまでといふものは私どもの間に暗い影の射すやうな事は決して無かつたんで御座いますからねえ。

「いや事實をお話する前にもう一つ申上て置く事が有り
す。……私どもが結婚しました時に妻は其財産一切を擧げ
て私に譲りましたので……私は那麽物が有ると若しや私
の職業が思はしくないやうになつた時に下らぬ考へが出
て困るだらうと思つてそれを欲しなかつたのですけれど
も妻が強つてと言ふものですから遂に其通りに致しまし
たのです。それで……六週間ほど前でしたらうかアレが私
のところへ参りまして、

「ねえ貴君あのう私がお金をお渡ししました時に何時で
もお金の要る事があつたら左様言へツて仰在いましたね。」
と申しますので、

「あゝ無論さあれは皆お前のだもの。」と斯う私が言ひま
すと、

「ぢやあのう百ポンドばかり頂だき度いのですが。」と斯
うです。私は聊か驚ろきましたね。私は單に新衣裳を欲しい
とか何れ那麽事だらうと思つてたものですから……

「そんなにお金をお前は何にしやうと思つてるんだい？」
と訊きますと、妻は少し戯謔がかつた風に、

「だつて良人は單だ私の銀行だつて仰在つたぢやありま
せんか。そして銀行はお金を引き出す人に何に使ふんだな
んで尋ねないのですワ。」と申しますので、

「全く入用だといふんなら上げませうさ。」と私が言ひま

すと、

「え、ほんとに要るんですの。」

「然し何に使ふか、それは話さないと言ふんだね。」

「他日申上げませうよねえ良人……けども今は不可ませんワ。」と斯う申すのです。

どうも其上に執拗く問ふ事も出来ませんから、それで我慢はしました。が、抑も是れが私どもの間に秘密が宿り始めた原因なのです。私に妻に小切手を與りまして其後はそれを深く考へませんでした……何も是れが此度の事と關係が有ると申す次第では無いですが、兎に角這摩事が有つたとお知らせして置くだけなんです。で先きほど申しました

通り宅から餘り遠くない所に一軒小家が有りまして彼方と此方の間に鳥渡した原が有りですが、彼方へ行かふとするには、本道に沿ふて、それから小徑へ曲がつて行かなきやならないんです。其彼方へ行かうとするところにスコットランドの樅の列樹が有りですが、私は其木下路をそゞろ歩きます。事が非常に好きなんです。その小家は此八ヶ月ばかり空虚になつてゐたのです。そして古風な入口であたり一面忍冬が絡みついて、實に趣きのある家なんです。私は立止まつてはよく考へ込みましたねえ、此家へ住居をしたら甚麼に可愛い家庭が出来たらうと。

丁度前の月曜日の夕方、の事ですが、例の木下路を散歩し

てゐますと小徑から空虚の荷車が一臺やつて來ました、そして追々其小家へ近づくと従つて入口のところの草地に絨織だの其他色々の世帯道具が積んであるのが眼に入りました。ア、愈よ誰れか借りたな、と私は思つたのです。そこで私は通りすがりに一寸足を止めて、一体どんな人が移轉して來たんだらうと、其邊を見廻ししきりに穿鑿の眼を辿らせた時に、弗と、二階の窓から私を見下ろして居る者があるのに氣がついたのでした。

まア、ホルムスさん、其顔は何と申上げたら好いやら……實に私はゾツとして背後まで徹へるやうな氣がしたので、私は其顔の見えないやうにと、少し後へ戻りました……

どうしたつて人間の顔ぢや無かつたんですものね、然し私はモウ一度其顔をよく見て置きたいと思つて急いで引きかへしたんですが、其時、まるで部屋の暗い所から何者か々浚つて行つたやうに、急に消えて失くなりました。私には五分間ばかり立止つた儘あれやこれやと思ひ回らしてゐました……どうも其顔が男のやつたか女のやつたか、それすら申上げる事が出来ません。まア一番私を憐ませたのは其顔の色ですね、かう鉛色と黄色を交ぜたやうな、殘忍酷薄の相を帯びた……そりや實に不自然極まる顔だつたんですから、私は餘り心を動かされたので、尙つと此小家の人たちの事を知りたと思つて、入口へ近寄つて扉打をし

ましたところが直ぐに中から開いて、身長の高い、瘦せた、やかましい忌やな顔容をした女が出て來まして、

「何の御用ですか？」ツて南方の音調で申しますから、

「私は御近所の彼處に居るものですが」と私は宅の方を指さして「どうか只今御移轉になつたやうな按排で……何か私どもでお助け申すやうな事でも御座いますやうな……」

「はい、何れ又願ひたい時にお頼ん申しまほう」と突慥貪に言ひ捨て、トピシヤンと扉を閉めたのです。その粗率な他に反抗するやうな態度が、癪に障つて、私は宅へ歸つちまひました。私は其晩外の事を考へて紛らさうと致しました

けれども、什麼いふものか、例の窓の顔と、突慥貪な女の事ばかり胸に浮んで、實に弱つちまひました。私は此事に就いては妻に何事も知らせぬ積りでした。彼女は非常に神経質ですから……また、自分の不愉快の分け前を彼女に與るのも罪だと思つたものです。然し私は睡込んでしまふ前に、其小家が塞がつたといふ事だけは知らせました。が、妻は黙つてゐました。

私は非常に寢坊なので、家中のお笑ひ草になつてゐるんです。が、その晩だけは例の一件の考へに妨たげられたのだから、何だかどうも常夜のやうには睡れなかつたやうでした。ところが半ば夢心地に、部屋の中に何か物の氣配がするやう

に感じて漸次気が確かになつて来るに随がつて私の妻が
着物を着更へて、外套と帽子を着けてるところだと解ると
さア私も驚ろいて寢惚聲を出さうとして妻の顔を見ると、
蠟燭の光りに輝らされた其顔と言つたら……私に餘り驚
ろいて聲も出ませんでした！實に大變な表情を現はして
ゐたんですからね……まるで死人のやうに青白い色をし
て、息遣ひも忙しく、外套の釦をかけながら、私がよく睡つて
るか奈何かと偷むやうにして見て、愈よ大丈夫と思つたも
のか密そりと部屋から忍んで出ました、間もなく私は扉
のきしむ音を聞いたのです、その音は入口の扉の鏝鉸に相
違なかつたから全く妻は外出したのですね、若しか夢ぢや

三千

アないかと、寢床の手擦へ指の關節をブツつけて見ると、馬
鹿に痛いから、そこで枕の下から時計を取り上げて見ると
モウ夜半過ぎの三時です、這麼時刻に外出して私の妻は一
体何を爲すかと私は思ひましたよ。

私は床の上に坐りなほして廿分程の間色々考へて、
して此問題を解決しやうと致しましたが考へれば考へる
程難かしくなるばかりです、そこで私が困つて居ると
ころへ、微かに入口の扉を閉める音が聞こえて、やがて階段
を上つて来る登音がするのです。

第六章

私は、妻が部屋に入るや否や、

「エフイー、お前は何處へ行つて来たんだ？」と唖鳴りますと、妻は實に驚ろいた様子で、息の切れるやうな聲で叫びました。私が、私は其驚ろいた様子と叫び聲とで、以て、あゝこれは必ず何か暗い秘密が有るんだなと思つて、私は實に忌やかな氣が致しましたね。私の妻は平生極く明けッ放しの性質ですのに、其女が、部屋へ歸るのに、忍んで来て、良人に聲を懸けられて、驚ろいて叫ぶなんて、實に私は怨めしく思ひました。

妻は苦しきうに笑ひながら、

「まア貴君起きてらしつたの？ 私はまた甚麼事が有つて

もお目覺ぢやなからうと思つてゐましたのに。」と申しますから、私は寧ろ冷淡に重ねて尋ねました、

「一体お前は何處へ行つてたんだ？」

「叱驚なすつたのも無理ぢやないワ」と態と平氣に答へました。私が、私は妻が外套を脱がうとして居る、其指が震へて居るのが眼につきました。妻は又言葉を繼いで、

「まア私は眞實に是れまで這麼事ツたら無かつたんですよ。今夜はどうしたつて云ふんですか、厭やに窒息しさうで、苦しきくつて、堪まらなかつたんですもの。それで、こりや新らしい冷たい空氣を吸はないと倒れるかも知れないと思つて、暫らく入口に立つてゐましたの。今はモウすツかり

快くなりまししたッ」と申すのです。

三十四

斯う私に話してゐる間にも唯だの一度も妻は私の方を見ませんし、聲も平生とは大變に異つてゐるので、これは嘘を言つてゐるなど、直ぐに知れました。私はモウ返辭をせず、クルリと壁の方へ向いて了ひましたが、さア諸々の疑念が浮んで来て、胸も痛くなるばかりでした。

妻が私に隠してゐる事は何だらう？ 此夜中過ぎに外出して何處にゐたらう？ など、色々考へて、全く其疑ひが解けるまで私は落ちつく事が出来ないので、すが私はモウ一度妻に嘘を吐かれてからは決して彼女に尋ねやうとは思はないんです。それで其晩は煩悶に煩悶を重ねてマ

ンシリとも致しませんでした。

私は其翌日ロンドンへ來なけりやならんのでしたが、私はモウ自分の職業に注意する事も出来ない程に憊まされたのです。妻も私と同じで、チヨイくと偷むやうにして私を見るどころから考へて見ると、妻はモウ自分の嘘を觀破かれたのを悟つて、モウ仕方がないと思つてゐるらしいんです。ね、朝飯の時に辛と一言話したばかりで私は飯が濟むと直ぐに運動に出かけたのです。新鮮な朝の空氣を呼吸したら少しは良い考へが出るかも知れんと思ひましてね。

私は遠く水晶宮まで出かけたのです。そして彼處の遊園地で一時間ばかり費やして、ノーブリーへ歸つたのが午後

三十五

の一時でした。其歸り途に例の小家の傍を通つたものですから、私は偶と足を止めて、若しや彼の奇妙な顔を見る事もあるらうかと、其邊を見廻して居りますと……ホルムスさん、私の驚ろきを察して下さい、不意に其小家の扉が開いて、そこから私の妻が出て来た。ちやアありませんか！

私は驚ろきの餘り聲も出ませんでした。妻の驚ろきやうと云ふものはまた非常であつたのです。妻は直ぐに其家へ戻らうと爲るやうな風でしたが、さう何も彼も隠したつて駄目だと悟つたと見えて、蒼白い顔に苦しさうな微笑を浮べて近寄つて来て、

「あら、良人お歸でしたの？ 私はね、今此お家の手助けでも

爲やうかと思つて来てみましたの。あら、何故そんなに睨めてゐらッしやるの、良人怒つて？」と申しますから、

「フムさうか、此處へお前は昨夜も来てたんぢやないか？」と言つてやまずと、

「まア良人何をおッしやるの？」と妻は叫びましたんです。

「いゝえ、お前は此家へ来たんだ！ 解つてるさうどうもお前が度々やつて来なけりやならんやうな此家の人たちは一体何者なんだい？」と私が言ひますと、

「私は前に此家へ来た事は有りません。」と未だ強情を張るので、私はモウ堪まりかねて、

「何故さう分り切つた嘘を吐く？お前の聲を御覽まるで變つてるぢやないか。私は從來お前に何か隠した事が有るか？好矣ッ。私は此家へ入つて見やう。什麼事が在るんだか見極めない中は承知が出来ないから！」と私が叫びますと、

「いえ、いえ、那麼事を爲すツちや不可せん！」と妻は破裂するやうに絶叫して、私が其家の入口へ近寄つた時に私の腕を掴んで、非常な力を出して引き戻しまして

「決して那麼事を爲すツちや不可せんよ！私は良人に誓ひます！他日必と皆申し上げますから。今良人が此家へお入りなすツちや不幸が起るばかりです。」

だけけれども私は、猶ほも振りちぎつて進まうとすると、妻はモウ狂氣のやうになりまして、

「良人私を信じて下さい！此度だけで好う御座んすから何卒私を信じて下さい！決して良人の後悔なさるやうな事は致しませんから！私は良人の爲めになるんで無ければ決して秘密を隠しませんから！若し良人が私と一緒に宅へ歸つて下されば無事に済みますが、どうしても此家へお入りになるなら良人と私の間は是れッ切りです。」

と斯う妻が叫んだ時の様子といふものは、實に熱心の極に達して、如何にも哀れに絶望したらしく見えましたから、私も暫らく入口の所に躡踏してゐましたが、とう／＼口を

開いて、

四十

「ぢや私は一つの條件を附けてお前を信じてやらう！その條件といふのはね此度の秘密はモウ此場限りとする事……それから此秘密を隠して置くのはお前の勝手だがお前は今後決して夜中の訪問や及びそれを類した所業をせんといふ事を私に誓ひなさい！そうすりや私は喜んで此度の事を忘れるやうにしやうよ。」と申しますと妻は辛と蘇生したやうに溜息を吐いて、

「良人は眞實に私を信じて下さつたのね何でも良人の仰在る通りにしますよ。さア宅へ歸りませうよ、ね歸りませうよ。」と私を引張つたなりに歩き出したのでしたで、私は歩

き出す途端にヒョイと振り返つて見ると例の黄ろい、やかなしい顔が二階の窓から覗いて居るのです。……一体此變な人間と私の妻との間には什麼關係が有るのか知らん？あの突慥な女とは如何いふ續き合ひだらう？と考へれば考へる程解らなくなる而已でした。私はどうも其奥底まで突き留めなければ安心が出来ないやうに感じましたのです。

其事のあつた後、二日といふもの私は宅に居りましたが、妻はよくく私との約束が利いたものと見えて一歩も家の外へ出ませんでした。

ところが三日目に至つて、私の妻の、アノ嚴重な誓ひも妻を

四十一

して其夫も義務も眼中に無いやうにさせる彼の秘密の勢力には敵はないといふ事が解りました。

丁度其三日目に私は用を足しにロンドンへ來ましてね、平生は三時三十六分の汽車で歸るのですけれども其日は都合に依つて二時四十分の汽車で歸りまして宅へ着いて見ますと下女が周章てた容子で迎へに出て來ましたから、

「奥さんはどうした？」と私が尋ねますと、

「何處か其邊へチヨイトあのう……散歩にゐらしつたんで御座います。」といふ返辭です。

さア私の心は疑念で充滿になりましたね。そこで全く妻が居ないかどうか突き留める爲めに二階へ駆け上つて其

邊を見廻した拍子に二階の窓の一つからヒヨイと外の方を見ますと、今しがた私と話をした下女が大急ぎで原を横ぎつて例の小家の方へ驅けて行くところなので、もう悉皆解つちまひました……妻は私の不在を見はからつて彼の小家へ行つて、若し私が少し早く歸るやうな事があれば直ぐに知らせて呉れるやうに下女に頼んで置いたのですな。私は實に激したです！さうして今度こそは悉く發いてやらなくちやアといふ決心で直ぐに宅を飛び出して、小家へ向つて駆け出しました。私は妻と下女が大急ぎで歸つて來るのに遭ひましたが、足も留めず話も致しませんでした……目の前には、例の秘密の伏在してゐる私の生涯に暗い影を

投じた小家が立つてゐます。エ、もう如何でも成れッ！今度こそは秘密を見破つてやるんだからといふ意氣込みで私は扉打もせず唐突把手を廻して家の中へ飛び込んだのです。

第七章

這入つて見ると階下は静かなものです。臺所を覗いて見ると火にかけて御馳走の支度だつたのか鍋がひとつグワラ／＼沸き立つてゐてその傍の籠の中に大きな黒猫が圓くなつて臥てゐるばかり外には人の氣配も無いのです。そこで私は他の室々も檢ためました。が何處も彼處もガランと

してゐますから直ぐに又二階へ駆け上つて見ましたが此處も同様に人ツ子一人ゐないので目には當る一切の道具や書なども有りふれた俗極まる物ばかりでした。然し私が奇妙な顔を見たアノ窓の附いてる部屋だけは却々心地よさうに上品に飾り附けてあつたのです。ところが煖爐棚の方へ目をやると私は實に燃江るやうな思ひが致しました。……どうでせう其上には三ヶ月程前に私が撮らせた妻の全身の寫眞が立てかけてあるぢやありませんか！

私は尙ほ家の内に果して誰れも居ないか如何か確かめる爲めに暫らく中に居て動靜を俟がつてゐましたが愈よ誰れも居ないと見當がついたので胸に非常な苦痛を抱

いて歸りますと妻は直ぐに出迎へました。私にはモウ人と
言葉は交はすのも厭やな程腹の立つて居る時です。から突然
妻を推し除けて私の書齋へ引込みました。妻は直ぐに私
の後から蹤いて來たので私が扉を閉める前にモウ中へ這
入つてゐまして、

「お約束に反きまして、申譯も御座いませぬ……然し良人
が事情を能うくお知りになれば必と私を許して下さいま
すでせう。」と斯う申しますから、

「そんなら皆打ち明けて了へば好いちやないか。」と私が
言ふと、

「良人！それが私に、出來ないんですから！」と悲しげに叫

びました。私はモウ堪まらなくなつて

「あの小家に住んで居るのは何者か、お前が寫眞を與つた
のは誰れか、悉皆私に打ち明けるまでは、私はモウお前を信
じないからね。」

と言ひ捨て、私は宅を飛び出しました。これは昨日の
事なので御座います。私はモウそれツ切り歸宅しないので
す。から妻が如何して居るか、此妙な事件が什麼いふ成り行き
になつて居るか、少しも存じませんのです。これが實に私ど
も夫婦の間に暗い影の射し始めですが……私は全く善後
策をどうしたら好いか、鳥渡も當りが附かないで困つて居
んで御座います。ところが不意に今朝貴君の事を思ひつき

まして、これはホルムスさんにお願ひするのが一等だと存
 じまして伺がつたやうな次第なんで御座います。若し未だ
 私の説明の足りない所がありましたら何卒お問ひ下さい
 まし……然し私は直ぐにどうか致さなくちやなりません
 ん……モウ實に堪へられないのですから。」

ホルムスと僕は非常な興味を以て、此不思議な物語を傾
 聴した。マンロー氏は頗る激昂の態で之を話したのである。
 我が友ホルムスは今や沈思黙想に耽るものゝ如く手で腮
 に杖ついて暫らくの間黙つてゐたが遂に口を開いた。
 「貴君が窓で御覽なすつた顔は確かに男のだといふ保證
 が出来ますか？」

「さア……いつも多少隔たつた所で見たのですから、どう
 も確かに申上げる譯には参りません。」

「然し、貴君はそれを御覽になつて、非常に不愉快だつたと
 仰在るんですね。」

「え、實に不自然な色で……殆んど人間のとほ思へない
 位ゐでしたから。そして私が近づいてよく見やうとすると
 恰で消えるやうに失くなるんですものね。」

「貴君の奥さんが百ポンド呉れろと仰在つてから何日ほ
 ど経ちましたらう？」

「殆んど二ヶ月です。」

「奥さんの前の御亭主の寫眞を御覽になつた事はありま

せんか。」

「有りませんです……尤も先夫が死去つてから間もなく、アトランタに大火が有りまして、寫眞などは皆焼いて了つたさうです。」

「奥さんはマダ例の死亡證明書をお持ちですか、貴君は確か見た事が有ると仰在いましたね？」

「え、妻は其火事の後で、謄本を取つたのださうです。」

「貴君は、奥さんがアメリカにゐらしつた時の知己とでもいふやうな人にお會ひなすつた事が有りますか？」

「いゝえ。」

「奥さんはモウ一度アトランタへ行つて見たいなど、仰

在つた事はありますか？」

「ありません。」

「彼方から手紙の來た事は？」

「どうか……無かつたやうです。」

「や、有り難う御座んした……そこで私は今少し考へて見なければなりません……全く其小家に人が居らなくなつたとすると、少し面倒になつて來るな……若し然うぢやなくつて、其連中が貴君を避ける爲めに家を出たものとするれば、今はモウ歸つてる時分、譯もなく秘密を發く事が出來ますがね……ム、ぢや斯うして下さいな、貴君は今から直ぐにノーブリーへお歸りになつて其小家の動靜をお探り

下さい。そして愈よ歸つて來てる事がお分りになりました。決して激昂の餘り跳り込むやうな事は爲さらずに、私どもの所へ電報を打つて下さい。さうすりや私どもは電報を受取つてから一時間経つか経たない中に貴君と一緒になつて直ぐに事件の奥を突き留めませう。」

「若し尙且空虚ッぽでしたら？」

「其時には私どもは明朝伺がつて色々またお話し致します。充分其理由の解るまでは無暗にお怒んなすツちや不可せんよ。やお歸りですか、さよなら！」

と我が友はブランド、マンロー氏を送り出した後で、僕に對つて、

「どうも凶惡い事件らしいねワットソン君君はどう考へる？」

「ウムどうも外聞のよくない事のやうだ。」と私は答へた。

「さうさーどうも脅喝取財のやうに思はれる若しさうで無いとすれば、僕は餘程勘違ひしてるのだ。」

「ぢや脅喝者は誰れだらう？」

「そりや君、あの唯だ一つの上等の部屋にゐて、煖爐棚の上に女の寫眞を飾つて置く奴に相違ないさ。僕は斷言するがねえ君、あの窓から覗いたといふ變挺りんな顔は大いに注意すべきものだよ。僕は必と此事件を發いて見せる！」

「君はモウ筋道がついてるか？」

「あゝ、假定のさ！ 假定ぢや有るけれども、僕は此れが當らなかつたら、大いに驚ろかなけりやならんのだ……エフイ」といふ婦人のね、先夫は現に例の小家に居るんだよ。」

「えッ、どうして君は然う言ふ？」

「だつて君二度目の良人が其家に入り込まうとした時に殆んど狂するばかりになつて留めたといふ事を考へて見給へ、外に説明の仕様がなからう。まア僕の考へては多分斯うだらうと思ふんだね……彼の夫人はアメリカで結婚した。その前の亭主といふのが惡むべき性質の男だつたか、或は厭ふ可き癡病を持つてたんだねえ。それで夫人は厭やになつて遂に逃げ出して此英國へ歸つて來て、變名を名乗つ

て、新生涯に入つたのさ。で、夫人は結婚してから三年にもなるし、もう大丈夫と思つてたんだね……誰れか好い加減な人の死亡證明書をマンロー氏に見せて、其證書に記入してある名が前の良人の名だと言つて胡摩かしたんだらう……ところか不意に夫人の居所が先の亭主に知れたのだいや、或は此癡病人と夫人との間に月下氷人として立つた婆アさんの爲に發見されたのかも知れないがね。そこで奴等は手紙を送つて脅かしたんだね歸つて來なきや承知しないぞつていふ風にしてさ。それで夫人は非常に弱つて、百ポンド貰つて、それを奴等に與つて縁を切らうとしたんだ。ところが奴等は圖々しくやつて來たんで、マンロー氏が小

家へ移轉て来た人が有ると話した時に、夫人は何かの事で
以て其連中が彼女の脅喝者だといふ事を悟つたのだらう。
そこで其晩、マンロー氏の睡るのを待つて例の小家へ駆け
付けて、何卒彼女の位置を安全にさせて呉れるやうに頼ん
だのだ。然し駄目だったので又翌朝出かけたのだ。其訪問の
歸り途にマンロー氏に見つけられたといふのは我々が話
しに聞いた通りさ。そこで夫人は二度と再び其小家へ行か
ない、と約束はしたものの、何卒此恐ろしい相手の脅喝を免
れたいといふ一心で、遂に又二日の後其小家へ行つて、例の
寫眞で以て何の彼と言ひ争つて居るところへ、下女が駆け
つけて、旦那のお歸りを知らせたもんだから、さア驚ろい

五十六

たね、夫人はマンロー氏が必ず其小家へやつ来ると察した
もんだから、大急ぎで裏口から逃げ出すやうに奴等に命じ
たのだ……多分其近所に心もりとした立樹でも有るの
で、奴等はそこへ隠れたんだらう。だからマンロー氏は其小
家が空になつた所へ行つたんだ。もし今日マンロー氏が歸
つて行つて見て、未だ其家が空虚で有らうものなら、大いに
意外としなければならぬのだ。どうだい君、僕の所謂假定論
は？」

「成る程、さうらしく思はれるね。」

「然し今はノーブライの人から新らしい知らせの来るま
で、何も爲る事はないんだ。」

が我々は餘り長く待たなくとも好かつたので、丁度夜のお茶を飲んだところへ其知らせが來たのである。その文句は、

「コヤニヒトスメリ、マタレイノカホミユ、ヨハ七ジノキシヤニテキクンヲマチウケントホツス、キクンノクルマデハナニゴトモナサルベシ。」

第八章

我々が彼方の停車場に着いて、汽車から降りて見ると、彼れはブラットフォームに立つて、停車場のランプの光に其青白い顔を照されて、激したさまで震へながら待つてゐたのである。

彼れは我が友ホルムスの腕を把つて、

「ホルムスさん、奴等は未だ居ますよ、私は今此處へ來る途中で、あの小家にランプの點いてるのを見たんです。私どもは今度こそすつかり發いてやらなきやなりませんね。」

「それで貴君は奈何いふ手段をお取りになるお考へです

か？」とホルムスは、開いた並木道を歩き出した時に、かう尋ねると、

「私はモウ直ぐに小家へ闖入してやらうと思ふんですが、ね、甚麽奴等が住んでるか見てやらなきやア……私は貴君の方御兩人に證據人として其場へ立會つて頂きたいのですが。」

「フム貴君は全くさう爲様と決心なすつたのですか、奥さんがあれ程秘密を發くと爲めにならぬと仰しやつたにも拘はらず。」

「え、決心したんです。」

「それなら宜しい、私は貴君の考へを正しいと思ふので

す、何でもグズグズ疑つてゐるばかりぢや詮方が有りませんからね、勿論直ぐに突進すべしです、ね、蹶踏は我々をして失望に赴かしめるやうなもんですから。」

それは實に暗い晩であつた。そして我々が兩側ずつと生牆の車轍の跡の深い狭ツくるしい小徑へ曲つた時には、蕭々な小雨さへ降り出でたのである。ブランドマンロー氏は、那麽事にめげやしない、さも堪え切れなと言つた風に突進する。余等兩人は其後から一生懸命に蹤いて行くのだ。

「彼處に見るのが宅の燈火です。」とマンロー氏は木だちの間に燈めける燈光を指さして、半ば呟やくやうに言ふた。「こゝが小家です！」

と斯う彼れが言ふた時に我々は小徑の角を廻つたのである唯見ると成る程傍に一つの建物がある。黄ろッぽい光線が一とすぢ暗い大地の上に落ちて居るので未だ緊かりと戸締りのしてない事が解る。そして二階の窓の中に唯だ一とつ素晴しく光り輝やいて居るのが見える。丁度我々が其窓を眺めた時に或る黒い影がすうッと横ぎつた。

「ホラ！奴が居ますよ。」とマンロー氏は叫んで「貴君がたは今の影を御覧になつたでせう？さア私に蹤いて入らッしやい。」

我々は戸口に近寄つたのである。と不意に其影から現はれたのは一人の女で其背後からのランプの光りで後光を

射したやう暗いものだから私は其顔を認める事が出来なかつたが、女は両手を差し伸べて、いとも切なる哀願の容子。「貴君、どうかお入りなさらしないで下さいよッ！」と叫んで「何だか良人が今夜もらッしやるやうに虫が知らせたんですの！どうか今度も私を信じて下さいな、必と貴君に氣のすまないやうな思ひはお爲せ申しません。」

「私はモウお前を信ずる餘地がないんだ！」とマンロー氏は冷淡に呶鳴つて「私にはモウ係り合つて呉るな！私は友人諸君と一緒に秘密を發きに來たのだから、さッ避かんか。」と突然其妻を突き飛ばして進んだ。無論我々も後から轟々と入り込んだのである。此時又も一人の女が出て來てマン

六十四
ロー氏の行方を遮ぎらうとしたが、彼れは忽ち之れを後ろの方へ突き飛ばして、間も無く我々三人すでに二階に在つたのである。マンロー氏は直ぐに彼の窓の光り輝やく室を目的に突進した、我々は彼れの踵に接して入り込んだのである。

第九章

それは却々價値のある、よく飾り附けられた室であつた。二本の蠟燭はテーブルの上に燈してあり、なほ二本また燧燭の上に點されてあつた、隅の方を見ると、そこに机の上に突伏すやうにして、小娘らしいのが坐つて居る。我々が此

室へ入つた時、此小娘は直ぐに彼方向いたが見れば赤い上衣と白い長手袋を着けて居る。やがて此小娘が急に此方向いた時、僕は思はず恐れと驚ろきとで叫んだのである。まア……其顔の色といふものは實に奇妙なもので、其表情は到底人間のものに比へられない。

ところが間もなくして、秘密は發かれたのである。ホルムスが笑ひながら小娘に近寄つて、其耳の後ろへ手を廻したかと思ふと、ヒラリと顔がへつたのは一枚の假面である。

そこに現はれたのは恰も我が驚ろきを笑ふが如く、白い齒を露はにした黒奴の女の子ではないか！

餘り其子の容貌が嬉しさうなのに釣り込まれて僕も遂に笑はずには居られなくなつた然し、マンロー氏は自ら喉頭を擲んで、昵と瞞めてゐたが、とう／＼叫び出したのである。

「こりや一体……どうしたんだ？」

「私がお譯をお話し致しませう。」とマンロー夫人は寧ろ冷静な一種の誇りを以て部屋に入り込んで「良人は私がお約束した事に違反を爲すつて、無理に此家へお入りになつたのですから、私どもは愈よ最後の處置をしなければならぬのですわね。……私の先の良人はアトランタで死にましたが子どもは生き残つたんです。」

「お前の子供……！」

夫人は胸から大きな金盒を引き出して、

「貴君は之れを開けて御覽なさいましたか？」

「そりや如何しても開かなかつたやうに思ふが……」
夫人は弾機に觸れたと見ると表面の鏢鉸が刎ね返つて、其中には實に愛らしい、智慧の有りさうな顔の一男子の寫眞が在つたのだ、そして其寫眞の人物の容貌には、争ふ可らざるアフ리카人の特色が現はれてゐた。

夫人は話し始めた、

「これがジョンヘブロンです……世界に這麼氣高い人は無いと私は思つてゐるんです。私は此人と結婚する爲めに

歐羅巴人種から脱けて了つたんですけれども、私は決して、それを残念とは思ひませんでしたものね。たゞ不幸だと思つたのは、私どもの間に生れた子供がアフリカの血筋を多く引いた事で、此ルーシイはお父さんよりも尙ほ一層黒いのですよ。……ですが、黒からうと、黒くならうと、ルーシイは私の大切なく、な子です、母さんの可愛い子なの……ね。」これを聴くや否や娘の子は馳せ寄つて、母の裾にからまつた。

夫人はなほ語りつゞけるのだ。

「私が此子をアメリカに残して來ましたのは、此子が極く脾弱な性で御座んすから、若しか土地が變つて身體に悪

いかと思つたからでした。それで私は此子をば正直なスコットランドの女で、元と私どもへ奉口した者の所へ預けたのでした。……ルーシイは私の子だもの、といふ考へは平常有つたので御座います。……そこで英國へ参りまして、ち暫らくして……ねえ、良人……良人と如彼いふ間柄になりましたもので、すから、私は子供の事をお話するのをヒドク恐れたので、御座います。神様も私の心を哀れと思召して下さるでせう。私は唯だ良人を失ふといふ恐れ、爲めに、それを話する勇氣が無かつたんで、御座いますもの……で、私は良人と子供との間に、あれこれかと考へました末、遂に子供を捨て、良人を取る事にしたのです。

三年の間といふもの、私は子供の有る事を良人には秘密にして置いたので、ところが私は此子の乳母からの便りで、子供が大變よく生長して行くつて事を聞くにつけ私は遂々、モウ一度子供の顔を見度いもんだといふ氣を起したので、私は、どれ程此考へを廢さうとした知れないんですけれども、遂々、ダメで御座んした。そこで私は危険といふ事も知つては、あましたが、セメテ半月でも傍に置いて見たいといふ氣を起しましたの。

私は乳母に百ポンド送つてやりまして、うまく此小家へ住み込んで、私と何の關係もない普通の近所の人といふやうな風にしてやつたのでした。私は眞實に子供の事に就い

ては、注意に注意を致しまして、乳母に命令けて、日中は決して外出させないやうにして、又顔と手は全然何か被せるやうにしたので、御座います。私は全く若しか近所の人でも家の外を通り合はせて、窓の顔を見つけて、オヤ此邊に黒奴の子が住んで居るなど、言はれたら大變だと思つたから、すの私がヒドク心配し過ぎるやうな事が無かつたら、もつと善い智慧が出たかも知れないんですが、私はモウ良人に知れやしないかと、まるで半分狂氣になつて心配してゐたものですから。

小家の借人が出来たといふ事は、良人が仰をつたんで、すものね、その時始め私は翌朝まで待つ所存でしたけれども、大

へんに神経が興奮して睡れないものですから、幸ひ良人は
熟くお眠る方だし、大丈夫だと安心して床を脱け出したの
です。ところが良人は私の所業を能うつく御存知なのでし
た私の苦惱は、それが始まりでした。その翌日良人は別に私
の秘密を強つて尋ねやうとも爲さらずに、あのお約束だけ
で許して下さつたのです。

その後の三日目には、貴君が入らした時は辛と乳母と
小供が裏口から逃げた而已の時、御座いましたの今夜は
モウ此通り悉皆御覧になつたのですから別に申し上げる
事も御座いませぬのです。モウ此上は子供と私の身に就て、
處分をして頂たく而已で御座います。」

夫人は語り終つて両手を組み合わせ答へ如何にと待つ
のであつた。

暫らく二分間ばかり、グラントマンロー氏は黙つて言葉
は無かつたが遂に僕が今思ひ出して、嬉しいやうな答へ
方をしてくれた。

マンロー氏は突然小供を抱き上げて、接吻して、なほ隻手
に小供を抱いたまゝ、隻手を夫人の方へ延ばして、其手を把
り、扉口の方へ振り向いて、

「さア、委細の話は宅へ歸つて、緩りとする事にしやうぢ
やないか、私は非常な善人では無からうけどもね、エフィー、
私はお前が思つてるよりは幾分か解つた男のつもりだよ。」

ホルムスと私は彼等に随がつて、小徑を引き返した。そして、ノーブリーからロンドンへの歸途に、我が友は僕の袖を掴んで斯う言つた、

「君僕はノーブリーよりもロンドンの方が心配だよ。ノーブリーの家庭は永久に幸福だらう。」

第十一章

ロンドンにはベーカー町の宿へ立ち歸つても、ホルムスは蠟燭を點して夜更くるまで何か行つてゐて、其れが終つてから、寢床へ就く時になるまで、何事も言はなかつたが、愈よ寐るといふ時に彼れは斯う言つた。

「ワットソン君、もし僕が今後おもしろくないやり方をしていると、君の氣についた時があつたら、どうかね僕の耳許で叫やいてくれたまへ、「ノーブリーを忘れるな」とね。さうすりや僕は大きいに感謝するよ。」

(黄ろい顔をはり)

豫告

「身體が二たつ」(快漢ホルムス) 第二編

身體が二たつ！身體が二たつ！何たる奇妙の題ぞや、變幻出沒自在の惡漢の行動とホルムスの快腕と相俟ちて、如何に諸君の好奇心を満足せしめんとする乎。

明治三十九年五月廿七日印刷
明治三十九年五月卅一日發行

(定價廿錢) 郵稅二錢

著者

本間久四郎

東京芝區神谷町九番地

印刷者

熊田宜遜

東京神田區錦町三丁目廿五番地

發行所

東京芝區神谷町九番地光明寺内

笑變窟

複製を許さず

黄色の顔

著 コナン・ドイル

訳 本間久四郎

発行 明治39年 笑変窟

整形 TONTOKAIMO39 2016.11

原本 国会図書館の近代ライブラリー

黄色の顔

<http://p.booklog.jp/book/111039>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111039>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト